

# コミュニティカフェの実態と可能性

～市民の力はいかに地域を変えるのか～

(代表) 佐々木 佳 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース3年)  
五十嵐 聡子 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース3年)  
永谷 基 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース3年)  
榊屋 晴香 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース3年)

指導教員

眞鍋 知子 (人間社会研究域 人間科学系准教授)

## 研究概要

### 1. 研究目的

本研究の目的は、近年地域社会の身近な課題を市民の手で解決する手段として注目され、全国で開設が相次いでいる「コミュニティカフェ」が実際に地域社会にもたらす影響について明らかにすることである。コミュニティカフェとは、現在まで定義は統一されておらず、様々な定義がなされてきているが、「地域に住む人々が利用する」「他者とのつながりの形成を目的としている」「利用する人々が自由に時間を過ごせる」という点においてそれぞれ共通している。

研究の背景として、石川県羽咋市千里浜地区に2010年に開設されたコミュニティカフェ「おっちゃっ家」の運営者の話を通して、コミュニティカフェが従来では解決が困難だと考えられていた諸課題(高齢者の閉じこもりなど)を打開する有効な手段になり得るのではないかと考えるようになったことがある。しかしながら、既存の先行研究の多くは運営者や設計者側の立場からの分析が多く、コミュニティカフェの開設が地域社会にどのような影響を及ぼしてきたかについては詳しく明らかにされていない。とりわけ、地域社会にもたらされる影響を明らかにするには、利用者側の視点に立った分析を加える必要があると考え、利用者からの直接の聞き取り調査を伴う今回の研究へと着手するに至った。

### 2. 研究方法

本研究では、冒頭でコミュニティカフェを把握する上で重要な概念であると考えられる「居場所」について考察を行った。「居場所」という概念は時代の変化とともに多様な形態に変容して捉えられてきており、この考察は「居場所」としての役割が特に注目されている

るコミュニティカフェが現代の地域社会において必要とされる意義について検討する基礎となるものである。

次に、コミュニティカフェの様々な定義、および運営動向を既存の全国調査を通して確認したのち、先行研究について検討を加え本研究の課題、利用者側の視点を加えた分析の意義を明確なものとした。

現地調査は2011年6月より順次開始した。多様な運営形態が存在しているコミュニティカフェの実態を把握、既存研究でも扱われてきた運営上の課題の確認を主な目的とし、対象として選定した石川、新潟両県の計7か所において、運営者および運営に従事するスタッフからの聞き取りを行った。

さらに、本研究の課題である、利用者側の視点を加えた分析を行う対象として、先述した羽咋市のコミュニティカフェ「おっちゃっ家」に改めて足を運び、調査当日に訪れていた利用者10人に対し12項目の質問を設定して聞き取り調査を行った。その後、回答を質問項目ごとの分析や運営者側に対して行った聞き取り調査の結果を通じ、コミュニティカフェが地域社会においてどのような役割、機能を果たしているか等を総合的に分析した結果をまとめた。

最後に、本研究の過程から明らかになったそれぞれの事象を踏まえ、改めて現代の地域社会におけるコミュニティカフェの存在意義や今後の運営課題などについて検討した。

### 3. 現地調査の概要

本研究で大きなウェイトを占めている現地調査の概要は以下の通りである。なお、特に注記が無い限り、調査内容は活動状況の視察および運営者側への聞き取り調査である。

2011年

- ・6月7日 (火) 「なつかし家」(白山市)、「五十川堂」(野々市市)
- ・7月3日 (日) 「おっちゃっ家」
- ・7月13日 (水) 「寄らんかいね」(羽咋市)
- ・10月14日 (金) 「うちの実家」(新潟市東区)
- ・10月15日 (土) 「伴走舎」(新潟市中央区)、「ツルハシブックス」(新潟市西区)
- ・11月27日 (日) 「おっちゃっ家」:利用者からの聞き取り調査

それぞれの運営形態は多様であり、コミュニティカフェという形式を定義する困難さを再認識させられた一方で、いずれのコミュニティカフェも立地する地域社会の課題に応じた柔軟な運営が行われている。これらのうち、本研究に取り組む契機となり、運営者側、利用者側双方からの聞き取り調査を行った「おっちゃっ家」の概要を紹介する。

名称	おっちゃっ家
所在地	石川県羽咋市千里浜町
活動分野	地域の茶の間（高齢者の居場所づくり） 昼食の提供
活動概要	石川県羽咋市千里浜町で建設業を営む男性が毎週日曜日の午前10時から午後3時頃まで近隣の住民を対象に自宅を開放している。羽咋市市民活動支援センターの市民勉強会「志民塾」の活動が契機となり、事前準備、先行事例の視察などを行うなどの準備期間を経て、2010年8月に初めて開かれた。その後、不定期開催を経て、同年10月以降は現在のような週1回の開放頻度が定着している。 運営は男性の想いに共鳴した地域住民や、開設までの準備に関わった市民活動支援センターの職員など10人ほどが交代で担い、開放前の準備や後片付け、調理などを無報酬で行っている。利用者は近隣の高齢者を中心に20人前後で推移しているが、子どもたちや、男性の知り合いが遠方から訪れる場合も有る。利用者の過ごし方はそれぞれだが、主に利用者同士でのお喋りや、折り紙や将棋などの遊び、歌などを楽しんでいる。尚、1回につき300円(冬季は燃料費を加味し400円)を利用者から徴収しているが、経費の多くは男性の自己負担となっている。

#### 〈運営者の声〉

・一人暮らしの高齢者が増える地域の先行きに不安を感じ、羽咋市市民活動支援センターの「志民塾」に加わった。当初は、地域に住まう数名の高齢者が一つの家で共同生活を行う「寄るまいほ一む」の設立を目指していたが、急には出来ないもので、まずは自宅を地域の人たちに開放することから始めようということになり、今に至っている。最終的には、このような場所を羽咋市内の55町会全てに作ることが出来れば良いと思う。千里浜町に故郷として特別な思い入れが有る。いつまでも誇りに思うことが出来るような、思いやりの溢れる故郷をいつまでも残していきたい。



#### 4. 聞き取り調査からの考察

運営者側からの聞き取りによって、それぞれのコミュニティカフェの開設に至る動機は、生活の糧とするためではなく、運営者本人が地域社会において身近に体感した課題について解決を目指す素朴な感情であることが明らかになった。このため運営には常に収支の不安が付きまといがちであるが、各々運営形態を工夫するなどして無理の無い運営を行っていることが印象的である。そして、地域社会における課題の解決手段として「場づくり」を志向している点で共通している。コミュニティカフェという形態で提供した「場」で人々が集い、結びつくことによって身近な社会の課題を解決していくという基本的な理念は、今回調査対象として選択した7か所の運営者の間で共有されていた。

この運営者側の理念に基づくコミュニティカフェという場が、実際の地域社会にどのような影響を及ぼしているのか、地域社会の課題解決に本当に効果をもたらすのかを検証する上で、利用者側からの聞き取り調査の結果は大きな意味を持つ。今回は「おっちゃっ家」1か所のみで聞き取り、および分析を行ったが、実際の利用者の声からはコミュニティカフェが地域社会において「具体的に」どのような場として位置付けられ、機能しているのかを示唆する回答を多数得ることが出来た。「おっちゃっ家」の運営者は地域に一人暮らしの高齢者が増え、このことによる生活上の問題が表面化することに危機感を覚えたことが開設の発端になっているという。実際の利用者も運営者が当初想定した通り、一人暮らしの高齢者が中心になっているが、各々が異なった背景や趣味、性格を抱えているため、一括りにすることは出来ない。利用者に通ずるのは近隣住民であるということに限られる。

このことこそがコミュニティカフェの持つ特性であり、既存の施設やイベントなどでは解決が難しかった地域課題を解決する可能性ではないかと考えている。公民館やその他施設（「おっちゃっ家」が立地する羽咋市千里浜地区の場合、温泉を中心とした複合施設「ユーフォリア」など）、町会のイベントなどの「場」では、その場における過ごし方が主催者側によって規定されているため、その過ごし方に順応出来る心身状態にあることが参加の条件となり、どの場にも参加することが出来ずに孤立する住民を生みがちである。他方、「おっちゃっ家」の場合は、参加費の徴収以外は特に参加条件を設けておらず、利用者は「おっちゃっ家」という場での過ごし方を誰からも規定されない。誰にでも門戸が開かれている状況であり、近所に暮らしているという地縁で唯一結び付いた、多様な住民同士が顔を合わせ交流する機会を提供することに、「おっちゃっ家」は成功している。

しかし、運営者と利用者が共に同じ地域社会のメンバーであることによる障害も見えてきた。「おっちゃっ家」では多くの利用者が、運営者に経済的、身体的負担が集中していることを心配していた。運営者自身がこの負担を許容したとしても、利用者側が引け目を感じて足を遠のかせることも考えられる。これはお互いが見知った関係であるからこそその懸念である。運営体制を工夫して運営者の過剰な負担の軽減に成功している事例も有り、「おっちゃっ家」でも今後の課題として検討が必要だと考えられる。

## 5. 結論

本研究では、多様な形態を採るコミュニティカフェの現地調査、そして運営者側、利用者側双方の聞き取り調査を通して、コミュニティカフェの有用性と大きな可能性が改めて明らかになった。特に既存の施設やイベント等が提供してきた「居場所」と、コミュニティカフェが提供し得る「居場所」の差異とコミュニティカフェの優位性について確認することが出来た。現代における地域社会の課題を振り返れば、社会の急速な高齢化、コミュニティの空洞化、福祉ニーズの多様化などが挙げられるが、コミュニティカフェという形態はその多様性、柔軟性、そして地域に密着した運営特性から、これらの困難な課題を解決する可能性を提示することが出来るものと考えられる。各地のコミュニティカフェが様々なアプローチから地域課題の解決を目指していることから明らかなように、現代における「居場所」のニーズは非常に大きく、居場所の提供により解決の糸口を見いだせる地域課題もまた多岐に渡る。

一方で、運営上の課題も見逃すことは出来ない。特に、特定の運営者への負担集中は、運営者自身の問題だけではなく利用者心理にも影響することから、この課題を乗り越える仕組みの構築、運営の経済的な健全性の確立が、今後のコミュニティカフェの全国的な普及・運営の継続を目指す観点からも求められる。

### ・参考文献

- 阿部真大, 2011, 『居場所の社会学』 日本経済新聞出版社.
- 飯田詠子・初見学, 2008, 「都市におけるコミュニティ形成の場に関する研究——コミュニティカフェの運営形態を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集』: 331-332.
- 石本雄真, 2009, 「居場所概念の普及およびその研究と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3 (1) : 93-100.
- 松本真澄・余錦芳・上野淳, 2009, 「多摩ニュータウン高齢者支援スペースの活動と利用様態 - 永山地区「福祉亭」のケーススタディ 1」『日本建築学会大会学術講演梗概集』: 1235-1236.
- 前田智彦, 2006, 『アクティブ・エイジングの社会学 - - 高齢者・仕事・ネットワーク』 ミネルヴァ書房 : 157-167.
- 野辺政雄, 2006, 『高齢女性のパーソナルネットワーク』 御茶の水書房 : 51-73.
- 御旅屋達, 「新聞記事における「居場所」言説の変遷」: 263-264.
- 田中康裕・鈴木毅・松原茂樹・奥田俊信・木多道宏, 2006, 「コミュニティカフェのしつらえ方についての考察——運営者の発言の分析を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集』: 935-936.